

十一年己卯の夏六月、大伴宿禰家持、亡きに
し妻を悲傷びて作る歌一首

四六二番

今よりは 秋風寒く 吹きなむを いかにかひと
り 長き夜を寝む

弟 大伴宿禰書持即ち和ふる歌一首

四六三番

長き夜を ひとりや寝むと 君が言へば 過ぎに
し人の 思ほゆらくに

また家持、砌の上のなでしこが花を見て作
る歌一首

四六四番

秋さらば 見つつしのへと 妹が植ゑし やどの
なでしこ 咲きにけるかも

朔 移りて後に、秋風を悲嘆びて家持の作る
歌一首

四六五番

うつせみの 世は常なしと 知るものを 秋風寒
み 偲びつるかも